

児童における社会的勢力の受容に関する研究

Acceptance of Social Power in the Classroom

田 崎 敏 昭

Toshiaki Tasaki

問 題

人と人との間には必ずしも対等な関係ばかりではない。他人に影響を与えようとする人もいれば、その影響を受けようとする人もいる。他者に影響をより及ぼそうとする人をわれわれは社会的に勢力もっている人とみなす。

ところで、ある個人が他人に対し勢力をもつにはそれなりの背景が必要である。例えば、家庭において、兄や姉の方が弟や妹より強い勢力を持っているのは、兄は身体が大きくて力が強いとか、姉はいろいろなことをよく知っているとか、兄姉は自分の出来ないことが出来るとか、兄姉の言うことを聞いていれば何かもらえとか、歳上の者の言うことを聞くのは当然など、兄姉の属性や、兄弟関係の特質に対する弟妹側の認知があるからである。勢力の背景となる勢力源の属性や、勢力源とその受け手との関係の特質にはさまざまな種類が指摘され、分類されるが、どのような属性、あるいは関係の特質が勢力の基盤となるかは、勢力の受け手の地位や立場、欲求や認知によって異なってくる。

このように、なにが勢力の基盤となるかは、勢力を受ける側の個人に依存する面が強いのであるが、受ける側の立場や状況が同じであったり、類似している場合は共通した勢力の基盤を考えることができる。1959年、フレンチとレーヴン (French & Raven, 1959) は勢力源と受け手との関係の特質から、報酬勢力 (reward power)、強制勢力 (coercive power)、正当勢力 (legitimate power)、参照勢力 (referent power)、専門勢力 (expert power) の5つをあげ、これを「勢力の基礎

(bases of power)」と呼んだ。これら5種類の勢力の基礎に対し、彼らは簡潔で明解な定義を行っている。ここでは、勢力源を「O」、勢力の受け手を「P」とする。

報酬勢力—Oは、Pに対して報酬をもたらす能力をもっている、とPが認知することに基づく勢力。

強制勢力—Oは、Pに対して罰を与える能力をもっている、とPが認知することに基づく勢力。

正当勢力—Oは、Pの行動を規制する正当な権利を持っている、とPが認知することに基づく勢力。

参照勢力—Oのようになりたいと思うPの認知、つまりOに対するPの同一視に基づく勢力。

専門勢力—Oは特殊な知識をもっている、とPが認知することに基づく勢力。

その後、レーヴン (Raven, 1974) はこの5つの勢力に情報勢力 (informational power) を加え、勢力の基礎を6つとした。

情報勢力とは、OはPにとって有利な情報をもっている、とPが認知することに基づく勢力である。

ところで、勢力保持者はどのような種類の勢力を行使しようとするのであろうか。勢力保持者がどんな種類の勢力を行使するかは、行使者の個人的特性や、その時々集団の状況によって異なっている。

ベデルとシストラंक (Bedell & Sistrunk, 1973) は、大学生を被験者としたゲーム事態で、男性同士では女性同士より報酬勢力がより多く使われたと報告しているが、強制勢力の使用は男女間に差はないとしている。

ゴットシュタットとヘル (Goodstadt & Hjelle, 1979) はリーダーとしての勢力保持者を locus of control の I-E 尺度により、内的統制型と外的統制型に分けたところ、外的統制型の勢力保持者は強制勢力をより多く使用する傾向にあった。

集団の状況と勢力の行使との関係をみてみる。ゴットシュタットとキプニス(Goodstadt & Kipnis, 1970)は部下の数により、強制勢力の使用に違いがあることを明らかにしている。つまり、部下が少ない場合(3人)と部下が多い場合(9人)では、後者の方が強制勢力がよく使われるとし、これは人数が多くなるに従って部下の行動をより統制する必要が生じるためである、と解釈している。

キプニスとヴァンダーヴィヤー(Kipnis & Vanderveer, 1971)、フォーダー(Fodor, 1973)グレイとキプニス(Grey & Kipnis, 1976)は、部下の成績とリーダーの勢力行使との関係をみている。キプニスとヴァンダーヴィヤーは、大学生を被験者として募り、彼らに部下の報酬を左右する権限をもったボス(勢力保持者)として部下を監督する役割を与えて実験したところ、作業成績が良くない部下が1人いる場合は、そうした部下がない場合に比べ、他の部下に対して報酬勢力をより用いようとした、と報告している。フォーダーも、大学生を用いた同様な実験から、ボス(勢力保持者)は自分を悪く言う部下がいる場合は、そうでない場合より、他の部下に対してより報酬を与え、好意的な評価をすることを明らかにした。グレイとキプニスは、保険会社の第一線リーダーを対象とした調査研究から、従順でない部下がいる場合は、そうでない場合に比べ、リーダーは、他の部下に昇進や昇給などの推薦といった報酬勢力をより行使する傾向があった。これは先の実験結果とも一致する。

レーヴン(Raven, 1983)は児童・生徒が他の子どもに影響力を行使する際、どのような勢力を用いるかを測定するため、「漫画完成法(Cartoon-Completion Instrument)」という手法を考案した。

彼はこの方法を用い、アメリカ、アルゼンチン、日本の子どもがどのような種類の勢力をよく行使するかを比較検討した。そして、

- (1) どの国の子どもも情報勢力を多く用いる傾向がある、
- (2) アルゼンチンの子どもは、アメリカや日本の子どもに比べ、情報勢力を用いることが少ない、
- (3) 日本の子どもは、アメリカやアルゼンチンの子どもに比べ専門勢力を用いる傾向が多い、
- (4) 日本やアルゼンチンの子どもはアメリカの子ど

もに比べ、参照勢力を用いることを好む、などの結果を出している。

田崎(1990)も漫画完成法の日本版を作成して、小学生を対象に、給食、掃除、グループ学習及び遊びの場面で先に述べた6つのうちどのような種類の勢力を行使しようとするかを検討した。児童は4つの場面を通じ、男女とも情報勢力を最も多く選択し、以下参照勢力、専門勢力の順となった。特に、女子における情報勢力の選択は顕著で、ほぼ半数に近い子どもが選択している。男女とも上位3つの勢力で80%をこえており、子どもの日常生活では、これらの勢力がより重視されていることがうかがえる。他人に頼みごとをしたり、命じたりするにしても、そのことが二人の関係をネガティブな方向へ向かわないようにしようとする気持ちは、子どもの心にも働き、そのことが強制勢力や正当勢力といったハードな力よりも、情報、参照、専門といったソフトな力をより多く行使するようになるのである。

これは、レーヴンが先の研究で、日本の子どもは情報勢力をよく用い、準拠勢力を好むと述べていることとも符合する。

男女を比較してみると、男子は女子にくらべ、参照勢力、専門勢力を多く選択しているのに対し、女子は男子に比べ情報勢力をより多くえらんでいる。また強制勢力も男子より女子の選択が多いという違いがみられた。

以上は勢力を行使する側からみたものであるが、他方、勢力行使の対象となる子どもたちは、それをどう受け止めるのだろうか。これまで、社会的勢力の受容に関する研究はほとんどみられない。

そこで本研究の目的は、いろいろな場面で社会的勢力が行使された場合、被行使者はその勢力をどう感じ、どの程度受け入れようとするかを明らかにすることである。

より具体的に述べれば、学校生活における給食、ボール遊び、掃除、ゲームといった場面において、児童が強制、報酬、正当、専門、参照、情報などの社会的勢力を行使して他の子どもを従わせようとした時、勢力を受ける側の児童はそれぞれの勢力に対しどう感じ、どう受容するかを漫画完成法を利用して検討するものである。

方法

調査対象：O市内のA小学校5、6年生295名(男子152名、女子143名)。及びS市内のB小学校5、6年生227名(男子113名、女子114名)。

調査用紙：質問紙に Fig. 1のような子ども二人が会話をしている場面の図を提示し、「給食の準備の時間です。そして今日はあなたの班が当番です。給食当番のA子さんが、あなたに『牛乳をとってきてくれない』と言いました。あなたは、A子さんに『どうして私に言うの』とたずねました。」と説明文をのせ、

問題1. するとA子さんが、「もし、しないなら先生に言いつけるわよ。」(強制勢力)と、言ったとします。

- 1-a. 「こんな時、あなたならどうしますか」と問い、
5. 牛乳をとりにいく、
 4. たぶんとりにいこう、
 3. わからない、
 2. たぶんとりにいかないだろう、
 1. 牛乳をとりにいかない、

の5つの選択肢のなかから、1つを選ばせた。さらに、

- 1-b. 「こんな時、あなたならどんな気持ちになるでしょうか」と問い、
5. ひじょうによい気持ち、
 4. まあまあよい気持ち、
 3. わからない、
 2. 少しいやな気持ち
 1. ひじょうにいやなきもち、

の5つの選択肢の中から、1つを選ばせた。

問題2では、「もし、してくれたら、あまった牛乳あげるわよ。」(報酬勢力)、問題3では、「私が給食当番の班長だから、たのむのよ。」(正当勢力)、問題4では、「牛乳の置いてある場所を教えてあげるから。」(専門勢力)、問題5では、「ともだちじゃない、いいでしょう。」(参照勢力)、問題6では、「先生に早くするようにいわれているのよ。」(情報勢力)と、A子さんが言ったとして、1-aの問いと、1-bの問いとをくり返した。1-aでは各勢力の受容度を、1-bは勢

力行使に対する快・不快感を測定する尺度である。



Fig. 1 質問紙で使用された図

ここでは、この給食の場面のほか、ボール遊びの場面、掃除における窓拭きの場面、ゲームの場面を設定した。

結果

1. 各場面における児童の勢力受容度とその男女差
調査対象は二つの学校とも5、6年生であったが、両校は地域的に離れており(所在県が異なる)、教育の方針もかなり違っていたので、別々に集計した。

A校、B校の給食場面における勢力受容度の平均を、その種類ごとに男女別で示したのが Fig. 2と Fig. 3である。受容度の回答では「5」が相手の要請を完全に受け入れ、「1」が全く受け入れないことになっている。「3」は「どちらでもない」という反応で、中間

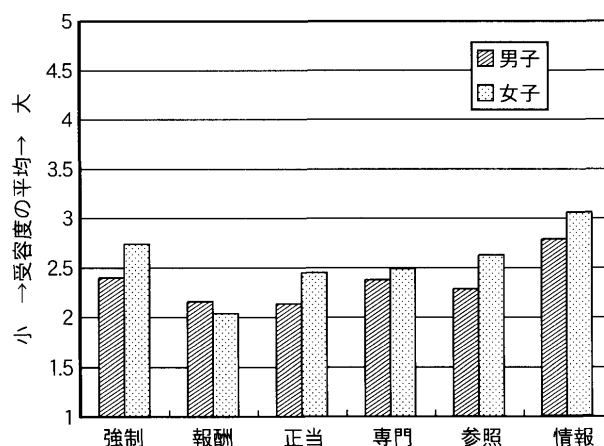


Fig. 2 給食場面における各勢力受容度の男女差 (A小学校)

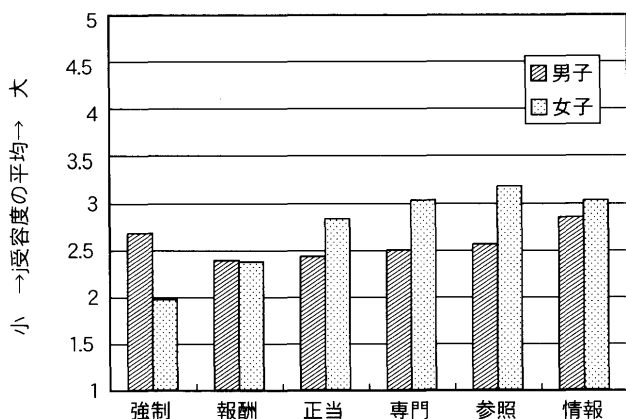


Fig. 3 給食場面における各勢力受容度の男女差 (B小学校)

を意味する。A校男子では情報勢力の平均が最も高く、以下強制、専門、参照、正当、報酬の順になっている。女子では、男子で三位の専門と四位の参照が入れ替わっているだけで、他の順位は男子のそれと同じである。男女間で比較してみると、報酬勢力を除いて、いずれの勢力も女子の受容度平均が男子の受容度平均より高い。分散分析の結果、単独で勢力間 ($F = 11.79, p < .01$)、男女間 ($F = 18.97, p < .01$) には有意差がみられたが、交互作用は差がなかった。B校の場合、男子の受容度平均の順序は情報、強制、参照、専門、正当、報酬であり、女子は参照、専門、情報、正当、報酬、強制の順で、男子と女子とでは順位がかなり違っている。分散分析の結果、単独での勢力間 ($F = 12.78, p < .01$)、単独での男女間 ($F = 8.20, p < .01$) として交互作用 ($F = 11.77, p < .01$) にも有意差があった。

ボール遊び場面におけるA校、B校の勢力受容度の平均を、その種類ごとに男女別で示したのが Fig. 4と

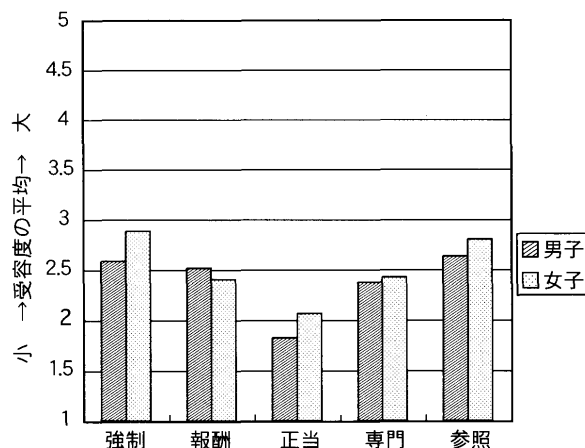


Fig. 4 ボール遊び場面における各勢力受容度の男女差 (A小学校)

Fig. 5である。A校では質問用紙に不備があり、情報勢力に関する受容度のデータが得られなかったのこ

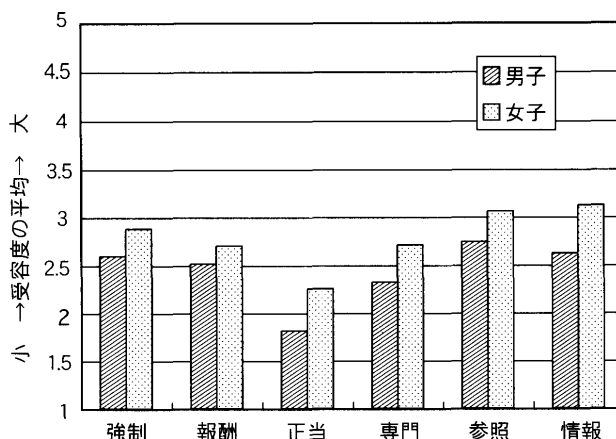


Fig. 5 ボール遊び場面における各勢力受容度の男女差 (B小学校)

こでは省いた。A校の男子では参照勢力の受容度平均が最も高く、以下強制、報酬、専門、正当の順である。女子は強制、参照、専門、報酬、正当の順で分散分析の結果、単独で勢力間 ($F = 12.08, p < .01$) には有意差がみられたが、男女間には差がなかった。一方、交互作用 ($F = 9.27, p < .01$) には差がみられた。B校の場合、男子の受容度平均の順序は参照、情報、強制、報酬、専門、正当であり、女子は情報、参照、強制、専門、報酬、正当の順である。分散分析の結果、勢力間 ($F = 21.66, p < .01$)、男女間 ($F = 39.92, p < .01$) は有意差がみられたが、交互作用には差がなかった。

掃除場面におけるA校、B校の勢力受容度の平均を示したのが Fig. 6、Fig. 7である。A校の男子では受容度の平均は、高い方から情報、報酬、参照、専門、正

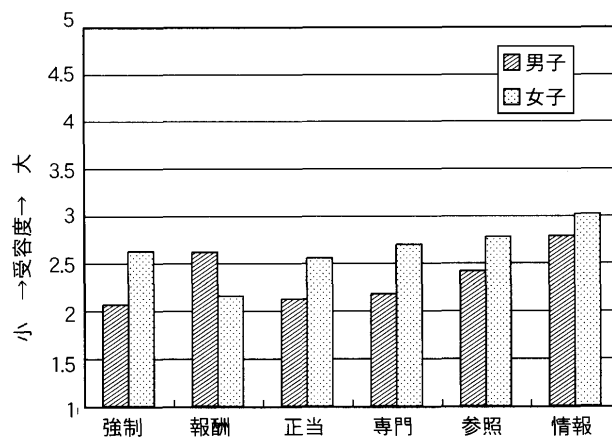


Fig. 6 掃除場面における各勢力受容度の男女差 (A小学校)

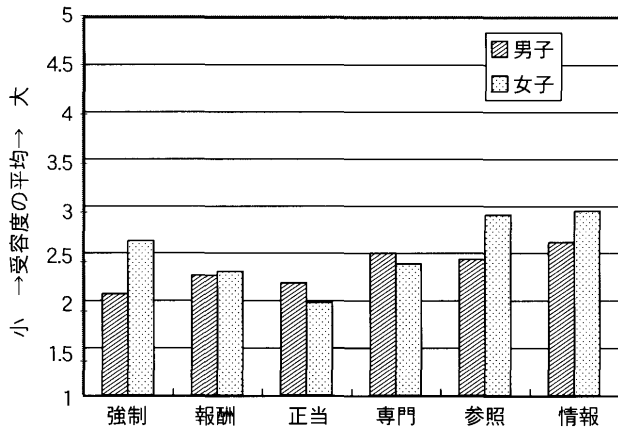


Fig. 7 掃除場面における各勢力受容度の男女差 (B 小学校)

当、強制的順であり、女子は情報、参照、専門、強制、正当、報酬の順になっている。分散分析の結果、勢力間 ($F=9.46, p<.01$)、男女間 ($F=23.78, p<.01$)、交互作用 ($F=8.52, p<.01$) いずれも有意差がみられた。一方、B校の男子では受容度平均は、情報、専門、参照、報酬、正当、強制的順であり、女子は情報、参照、強制、専門、報酬、正当の順になっている。分散分析の結果、勢力間 ($F=35.78, p<.01$)、男女間 ($F=10.02, p<.01$)、交互作用 ($F=5.22, p<.01$) いずれも有意差がみられた。

ゲーム場面におけるA校、B校の勢力受容度の平均を示したのが Fig. 8, Fig. 9である。A校の男子では情報勢力の受容度平均が最も高く、以下報酬、専門、正当、参照、強制的順である。女子では報酬勢力の受容度の平均が最高で、以下正当、情報、参照、専門、強制的順である。分散分析の結果、勢力間 ($F=3.85, p<.01$) にのみ有意差がみられた。一方B校男子は、

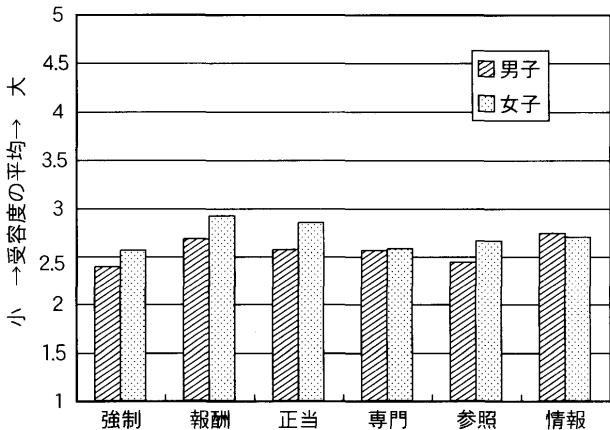


Fig. 8 ゲーム場面における各勢力受容度の男女差 (A 小学校)

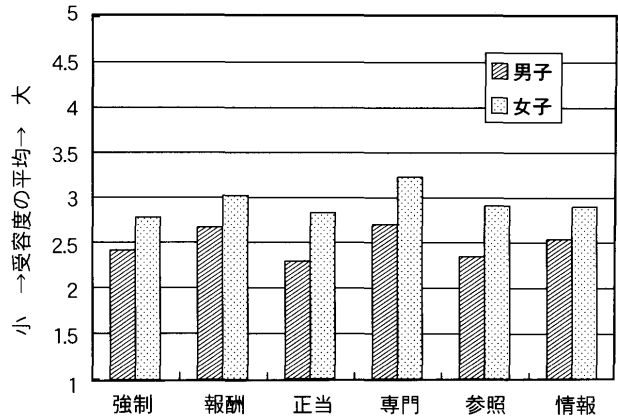


Fig. 9 ゲーム場面における各勢力受容度の男女差 (B 小学校)

専門勢力の受容度の平均が最も高く、以下報酬、情報、強制、参照、正当の順である。女子も専門勢力の平均が最も高く、以下報酬、参照、情報、正当、強制的順になっている。分散分析の結果、勢力間 ($F=4.88, p<.01$)、男女間 ($F=60.01, p<.01$) に有意差がみられた。

2. 各場面で行使された勢力に対する児童の快・不快感とその男女差

児童の快・不快感の測定では、5の反応が最も快と感じたことを意味し、1の反応が最も不快であることを示す。給食場面で行使された各勢力に対する児童の快・不快感の平均を男女別にみたのが Fig. 10, Fig. 11

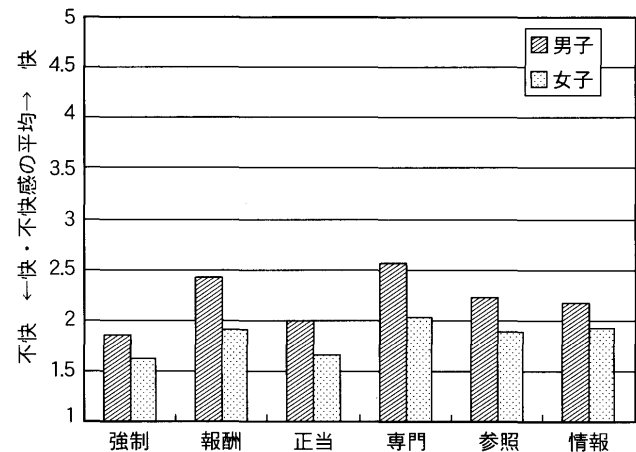


Fig. 10 給食場面で行使された勢力に対する快・不快感の男女差 (A 小学校)

である。A校、B校ともいずれの勢力行使に対しても、男子の平均は女子の平均より高い。勢力との関係では、A校男子の平均の順は専門、報酬、参照、情

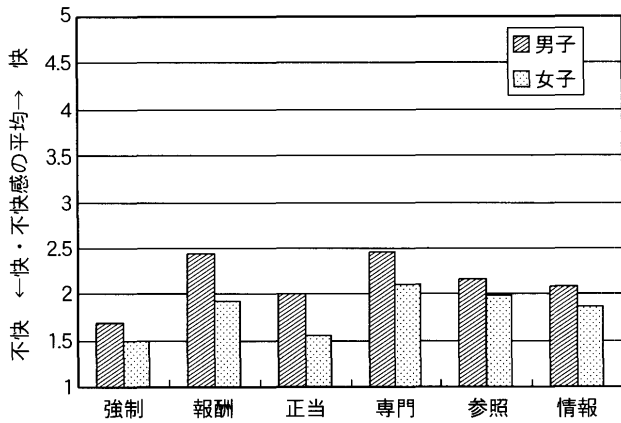


Fig. 11 給食場面で行使された勢力に対する快・不快感の男女差 (B 小学校)

報、正当、強制であり、女子は、専門、報酬、情報、参照、正当、強制的順で男子の三位の情報と四位の参照が入れ替わっただけである。分散分析の結果、勢力間 ($F = 43.21, p < .01$)、男女間 ($F = 55.54, p < .01$) に有意差がみられたが、交互作用は有意でなかった。一方、B校男子の快・不快感の平均の順は専門、報酬、参照、情報、正当、強制であり、A校の男子と同じ順であった。また、女子の順は専門、参照、報酬、情報、正当、強制であり、男子とはかなり異なっている。分散分析の結果、勢力間 ($F = 19.02, p < .01$)、男女間 ($F = 41.60, p < .01$) に有意差がみられたが、交互作用は有意でなかった。

ボール遊び場面における勢力行使に対して、A校、B校児童の快・不快感の平均を、勢力の種類ごとに男女別で示したのが Fig. 12と Fig. 13である。A校では質問用紙に不備があり、情報勢力に関する快・不快感のデータが得られなかったのでここでは省いている。

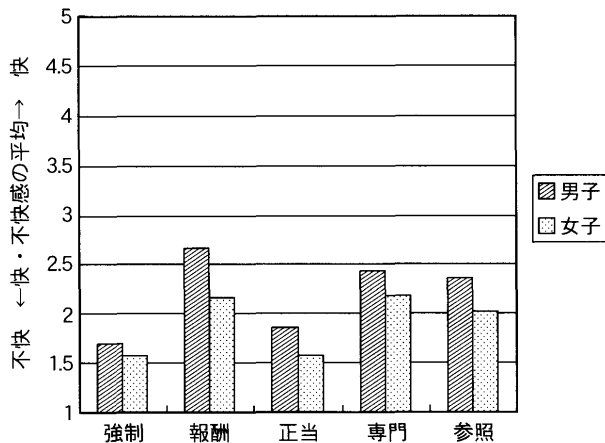


Fig. 12 ボール遊び場面で行使された勢力に対する快・不快感の男女差 (A 小学校)

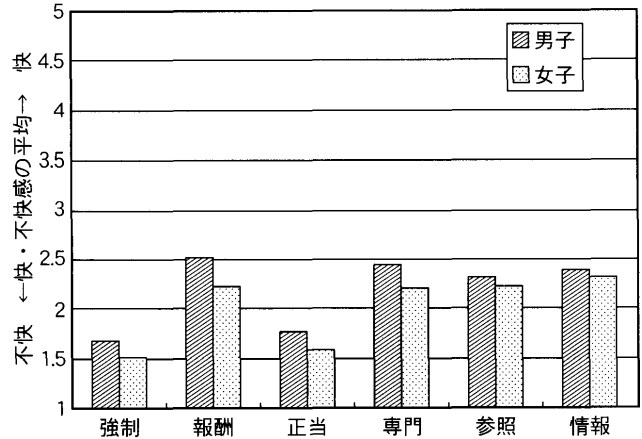


Fig. 13 ボール遊び場面で行使された勢力に対する快・不快感の男女差 (B 小学校)

A校、B校ともいずれの勢力行使に対しても、男子の平均は女子の平均より高い。A校では、男女とも平均の順序は報酬、専門、参照、正当、強制となっている。分散分析の結果、勢力間 ($F = 26.71, p < .01$)、男女間 ($F = 29.16, p < .01$) に有意差がみられたが、交互作用は有意でなかった。B校も男女同じ順序で、報酬、専門、情報、参照、正当、強制であった。分散分析の結果、勢力間 ($F = 35.86, p < .01$)、男女間 ($F = 11.01, p < .01$) に有意差がみられたが、交互作用は有意でなかった。

掃除場面における勢力行使に対して、A校、B校児童の快・不快感の平均を、勢力の種類ごとに男女別で示したのが Fig. 14と Fig. 15である。A校はいずれの勢力行使に対しても、男子の平均は女子の平均より高いが、B校においては正当勢力を除く他の勢力において、男子の平均が女子の平均より高かった。A校では、

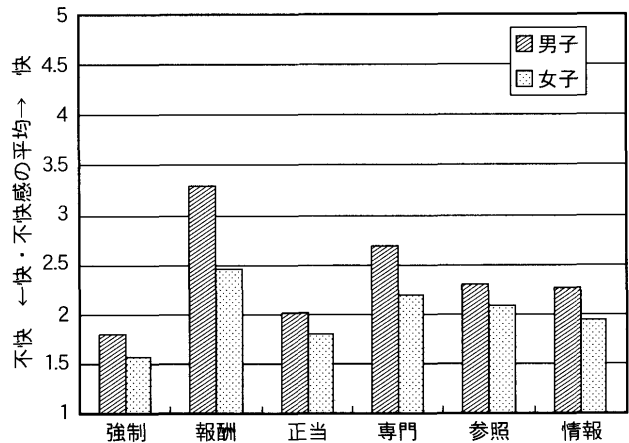


Fig. 14 掃除場面で行使された勢力に対する快・不快感の男女差 (A 小学校)

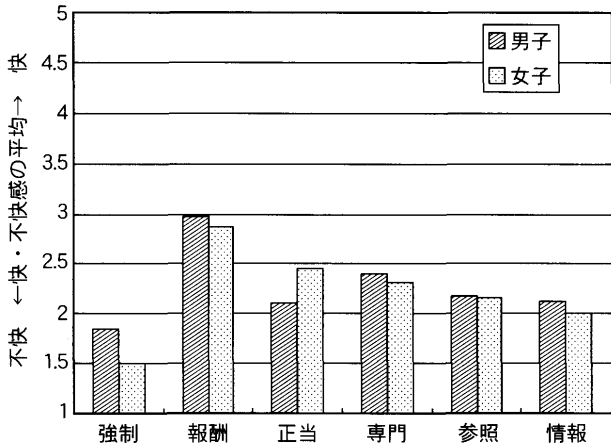


Fig. 15 掃除場面で行使された勢力に対する快・不快感の男女差 (B 小学校)

男女とも平均の順序は報酬、専門、参照、情報、正当、強制となっている。分散分析の結果、勢力間 ($F = 43.21, p < .01$)、男女間 ($F = 55.54, p < .01$) に有意差がみられたが、交互作用は有意でなかった。B校では男子の平均の順序で、報酬、専門、参照、情報、正当、強制であり、A校の男女と同じであったが、女子は報酬、正当、専門、参照、情報、強制の順となり、男子と異なっていた。分散分析の結果、勢力間 ($F = 41.17, p < .01$) には有意な差がみられたが、男女間および交互作用には有意差はみられなかった。

ゲーム場面における勢力行使に対して、A校、B校児童の快・不快感の平均を、勢力の種類ごとに男女別で示したのが Fig. 16と Fig. 17である。A校、B校ともいずれの勢力行使に対しても、男子の平均は女子の平均より高い。A校では、男女とも平均の順序は専

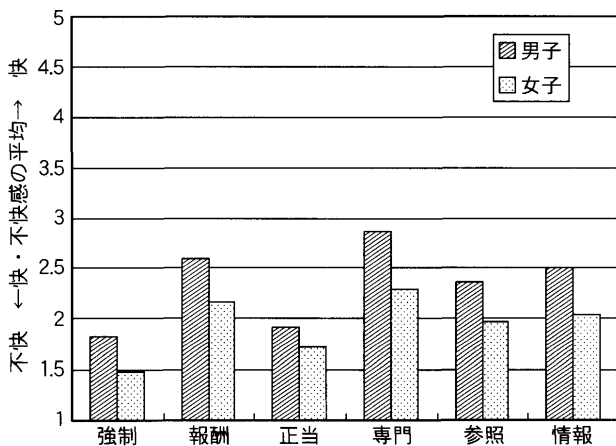


Fig. 16 ゲーム場面で行使された勢力に対する快・不快感の男女差 (A 小学校)

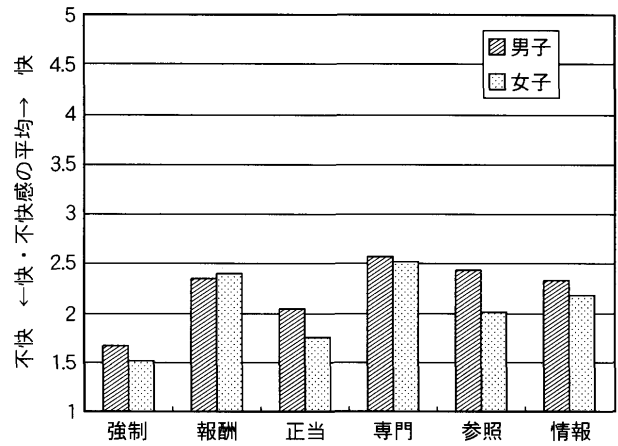


Fig. 17 ゲーム場面で行使された勢力にたいする快・不快感の男女差 (B 小学校)

門、報酬、情報、参照、正当、強制となっている。分散分析の結果、勢力間 ($F = 30.63, p < .01$)、男女間 ($F = 59.94, p < .01$) に有意差がみられたが、交互作用は有意でなかった。B校は男女の順序が異なり、男子では専門、参照、報酬、情報、正当、強制の順であり、女子では専門、報酬、情報、参照、正当、強制の順となった。分散分析の結果、勢力間 ($F = 30.58, p < .01$)、男女間 ($F = 10.15, p < .01$) に有意差がみられたが、交互作用は有意でなかった。

3. 児童の勢力受容度と快・不快感との関係

勢力に対する児童の受容度が、彼らがそのとき感ずる快・不快感と関係しているのかどうかを検討するため、場面ごとに算出された各勢力の受容度の平均と快・不快感の平均との順位相関をもとめた。

Table 1 がそれである。A校では、男子の掃除やゲームにおいて、受容度平均 .600、.714というかなり高い正の相関がみられたが、有意ではなかった。

Table 1 行使された勢力にたいする受容度と快・不快感との順位相関

	A校		B校	
	男子	女子	男子	女子
給食	-0.314	-0.314	-0.428	0.771
ボール遊び	0.083	-0.166	0.742	0.542
掃除	0.600	-0.142	0.485	-0.771
ゲーム	0.714	0.257	0.542	0.942

行使された際、より快と感じられた勢力ほど、受容されるということを意味する。B校はA校に比べ、相対的に両者の相関が高い。男子におけるボール遊びの

場面、女子における給食の場面は、.7以上あり、ゲーム場面では、.942である。これらは、快・不快感と受容度の関係が強いことを示すものであるが、統計的にはいずれも有意ではない。女子の掃除場面では-.77と負の相関がえられた。

考 察

1. 行使された勢力とその受容

本研究の主な目的は、一般にどのような種類の勢力が児童にとって受け入れ易いかを明らかにすることである。そこで、学校生活において子どもどうしで勢力の行使が行われるような場面を4つ選んだ。そのうち給食と掃除は学級の活動であり、教師の指導がある程度入る可能性のある場面である。それに対し、ボール遊びとゲームは全く子供どうしの活動である。

場面の設定では、児童Aの依頼に児童Bは「どうしてわたしにいうの」と反発するのであるから、Bの立場に立つ被調査者としての児童は、依頼された行為をしたくないという根源的な気持ちを有している。それに対してAはさまざまな勢力を行使して自分の依頼を実行させようとする。しかしBはAの勢力行使後もその基本的な姿勢は変わらないから、依頼された行為を積極的に受け入れようとする反応(質問紙の5、4の回答)はほとんどみられない。従って Fig. 2~Fig. 9にみる各カテゴリーの受容度平均が3.0以下であるのは当然といえる。そこで、ここで言う受容度とは、依頼された行為をどの程度実行しようとするかではなく、拒否の気持ちをどの程度緩和させるか、と解するのが妥当と考える。

さて、場面・学校別におこなった分散分析結果、どのカテゴリーにおいても、勢力間の受容度平均に有意差があり、勢力の種類によって児童の受容、つまり依頼への拒否の気持ちを緩和する程度が一様でないことが明らかになった。ではどの勢力が受容度を高めるのにより効果的であろうか。給食や掃除の場面では、相対的に情報勢力や強制勢力の受容度が高い。この場面で、B(被調査児童の立場)が「どうしてわたしにいうの」と言ったとき、Aは、「先生に早くするように言われているの」(情報勢力)とか、「してくれないと、先生にいうわよ」(強制勢力)と言い、自分の特性

や行動に拠るのではなく、教師を背景にした勢力を行使している。児童にとって教師はいろいろな意味で大きな力をもった存在である。このことが他の勢力にくらべ、情報勢力や強制勢力における受容度を高めたものと考察される。

一方、ボール遊びやゲーム場面では、報酬勢力や参照勢力での受容度が高い。この場面は遊びであるから、従うことによって得られる報酬や友達としての関係を保つことのメリットは小さくない。そのことが、こうした場面で報酬勢力や参照勢力における児童の受容度を高めたものと思われる。

以上のことから、児童においては一般的にある特定の勢力が受容され易く、他の勢力は受け入れられにくい、と言えるようなものではなく、行使されるどの種類の勢力が受容されるかは、その場面(状況)に依存すると言える。

分散分析の結果は、A校のボール遊び場面を除いて、他はすべて男女間の受容度の平均に有意差を示している。これは、男子に比べ女子のほうが、行使された勢力に対しより受容する、つまり依頼に対する拒否の気持ちをより緩和させているということである。女子が男子より他者の影響力をより受け入れることは、これまでの色々な研究の中でも明らかにされており、本結果もそれに沿ったものである。

2. 行使された勢力に対する快・不快感

それぞれの場面で行使された勢力に対し児童はどう感じるのか。Fig. 10~Fig. 17で示されるように、各カテゴリーの平均はほとんど3.0以下である。従って、ここで示される数値は、行使された勢力に対し、どれほど快かではなく、どれほど不快ではないかを意味すると解される。

さて、場面・学校別に行なった分散分析結果、どのカテゴリーにおいても、勢力間の快・不快感の平均に有意差があり、行使された勢力の種類によって児童の快・不快感が異なることが明らかになった。場面・学校・男女に関係なく、専門勢力と報酬勢力は他の勢力に比べ平均が高く、不快感を感じる度合いがより小さいと言える。一方、正当勢力や強制勢力の行使に対してはどのカテゴリーにおいても平均が低く、これらの勢力が行使された場合は大きな不快感を児童に与える

ものと言える。

一度拒否した依頼を、Aがもう一度依頼しようとする場面の設定であるから、B(被調査対象児の立場)にとっては本来不快な状況である。その時、フォーマルな地位(班長とか学級委員)を持ち出し(正当勢力)たり、従わなければ、不利になるような言動(強制勢力)をすればますます不快感が強くなることは容易に想像できる。

それに対し専門勢力や報酬勢力はBが従うことによって何らかのメリットを与えようとするものであり、それだけ不快感も弱くなると考えられる。

分散分析では、どのカテゴリーでも男女間に有意差があることを示している。Fig. 10の正当勢力以外はどれも、男子に比べ女子の不快感の程度は強い。他者からの圧力に対する感じ方に男女差があることが明らかになった。

3. 行使された勢力に対する受容と快・不快感の関係

一般に快と感じる事柄は受け入れ易く、不快と感じる事柄は受け入れ難いと考えられる。行使された勢力に関してもこのような事象は起こりうるであろうか。Table 1によれば、A校とB校ではかなり異なった結果である。A校では男子の掃除とゲーム場面以外はどのカテゴリーも値が低く両者に関係があるとは言えない。一方、B校ではいずれも.4以上あり、正負ともに高いが、どの相関値も統計的に有意ではない。ここでは受容度と快・不快感に明確な関係があるかどうか結論づけることは出来ないが、関係が示唆されたとは言えよう。

要 約

本研究は人が他者からさまざまな種類の社会的勢力の行使を受けた時、その勢力をどう感じ、どう受容するかを検討したものである。二つの小学校5、6年生を対象に漫画完成法を用い、自分が断った行為に対し、相手が強制、報酬、正当、専門、参照、情報などの勢

力を用いて再度要請したとき、それをどの程度受容しようとするか、またどの程度快・不快を感じるかを測定した。給食や掃除のような学級の活動の場面では、情報勢力や強制勢力の行使に対して、相対的に受容への抵抗が弱く、ボール遊びやゲームの場面では参照勢力や報酬勢力への抵抗が弱かった。このように、どの勢力が受容され易いかは状況に依存することが明らかになった。

一方、快・不快感では、場面、状況に関係なく専門勢力や報酬勢力は不快の程度が弱く、正当勢力や強制勢力に対しては強い不快が感じられることがわかった。

また、男女間では勢力の種類に関係なく、女子は男子に比べ行使される勢力に対する受容への抵抗が弱く、不快感が強いことがわかった。

引用文献

- Bedell, J. & Sistrunk, F. 1973 Power opportunity costs and sex in a mixed-motive game. *J. Per. Soc. Psychol.*, 25, 219 - 226.
- Fodor, E. M. 1973 Disparagement by a subordinate, integration and the use of power. *J. Psychol.*, 84, 181 - 186.
- French, J. R. P. & Raven, B. R. 1959 In D. Cartwright (Ed) *Study in Social Power*. Univ. of Michigan Press, 150 - 167.
- Goodstadt, B. E. & Hjelle, L. A. 1973 Power to the powerless: Locus of control and the use of the power. *J. Per. Soc. Psychol.*, 27, 190 - 196.
- Goodstadt, B. E. & Kipnis, D. 1970 Situational influence on the use of power. *J. Applied Psychol.*, 54, 201 - 207.
- Grey, R. J. & Kipnis, D. 1976 Understanding the performance appraised dilemma. *J. Applied Psychol.*, 61, 329 - 335.
- Kipnis, D. & Vanderveer, R. 1971 Integration and the use of power. *J. Per. Soc. Psychol.*, 17, 280 - 286.
- Raven, B. H. 1974 The comparative analysis of power preference. In J. T. Tedeschi (Ed.) *Perspectives on Social Power*. Chicago: Aldine, 172 - 198.
- Raven, B. H. 1986 Cultural differences in interpersonal influence and social power (unpublished)
- 田崎敏昭 1990 学級集団における児童の勢力行使に関する研究 佐賀大学教育学部研究論文集 第37集2号 113 - 22.